一九一〇年代慶應・ハーバード大学間の教員招聘過程

――R・J・レイを中心に――[1]

姜　兌　玧

一、はじめに
二、招聘に至るまでの背景
三、「ローウェル・慶應関係文書：一九〇九―一九〇四」
四、慶應・ハーバード関係を巡る幾つかの示唆点
五、おわりに

一、はじめに

本稿は、慶應義塾大学におけるハーバード大学からの経済学科教員招聘過程について、一九一一年に慶應義塾大学部に赴任したレイ（Robert Jackson Ray）を事例として具体的に考察するものである。

「お雇い外国人」という言葉に代弁されるように、幕末・明治日本は「文明開化」を掲げて積極的な西洋近代化に取り組む際に、多くの西洋人をも雇い入れた。金井圓の研究によると、明治政府は条約改正にともない外国

人雇い入れ規則が廃止される一八九九年までの約三〇年間に、政府（官傭）、民間（私傭）を併せて毎年六〇〇ないし九〇〇人の外国人を雇った。[2] こうした流れの一環として、大学といった教育機関においても多くの西洋人教員が招聘された。明治初期には政府の主導下で東京開成学校、東京医学校、東京大学等公立教育機関を中心に招聘作業が行われることが多く、関連研究も公立学校を中心にまとめられているものが多い。[3] 一方で私立の外国人教師に対しては、「私学雇入外国教師条約文例」の布達のもと、文部省管轄の許可制（一八七三（明治六）年一月）や届出制（一八七四（明治七）年）として雇用が行われた。[4]

こうした時代状況の下で、慶應義塾においても次第に外国人教師の招聘が活発に行われてきた。本稿で注目するところは、こうした招聘の具体的な過程、特に、日本から招聘の依頼を受けた出向先ではどのようなやりとりが行われていたのかについてである。その事例研究の一つとして、慶應の要請により一九一一年に理財科・政治科の教授としてハーバードから赴任したレイを取り上げる。ハーバード大学アーカイブス所蔵の「ローウェル・慶應関係文書、一九〇九―一九一四」[5] を通して、ハーバードの内でどのようなやりとりが行われ、最終的にレイが慶應に赴任することになったのかを、概ね確認できた。本稿ではその資料を紹介した上で、慶應・ハーバード間の教員招聘を巡る幾つかの示唆点についても、考察を試みる。

二、招聘に至るまでの背景

レイ招聘の背景を知るには、慶應義塾の大学部設立当時まで遡る必要がある。

一八八六（明治一九）年制定された「帝国大学令」により、東京大学は東京帝国大学に改称され、分科別大学や大学院が設置されるようになった。こうした学制制度の変化を契機に、慶應義塾でも大学部設置の話が議論さ

れはじめ、一八九〇（明治二三）年には義塾でも初めて大学部法律科、理財科、文学科が設置された。当時福沢諭吉は大学部設置にあたって、一八八九（明治二二）年にユニテリアン教会宣教師のナップ（Arthur May Knapp）[6]を介して、当時のハーバード大学総長であるエリオット（Charles William Eliot）に親書を送るなど話し合い、その結果、ウィグモア（John Henry Wigmore）、ドロッパース（Garrett Droppers）、リスカム（William Shields Liscomb）の三名がそれぞれ法律科、理財科、文学科の主任教師として招聘されることとなった[7]。福沢は一八八九年四月に送ったエリオット宛の書簡において「アメリカの最高学府と日本の教育機関との間に一層親密な関係を確立したいと私達学校当局は望んでおります」と述べた上で、大学部設置の際に「慶應義塾へ送られる教授陣の中から一人を選び、日本人学生の貴大学への入学予備試験を行なうよう正式に任命されること」、さらには「慶應義塾の教授陣を次第にハーバード卒業の人達で埋めてゆき、教科目や教授法をできるだけハーバードの組織や実際に近づけていき、また試験法も同じく進めて行って、遂には学位試験にまでおよぼす、言葉をかえて言えば、我々の学校を、ある意味でハーバードの日本分校（a Japanese Branch of Harvard University）にする」[8]と述べ、ハーバードを「アメリカの最高学府」であると高評価しつつ、慶應義塾をハーバードの「分校」にしたいと言っているほど、強いコネクションを結ぶことを構想していた。

三人の招聘教師のうち、ウィグモアは一八九三（明治二六）年にアメリカに帰国し、その後ノースウェスタン大学に在職した。同年にリスカムも病気でアメリカに帰国する。一八九八（明治三一）年一月、福沢はエリオットにリスカムの後任者となる文学部教師の招聘を依頼する書簡を送り、そこには具体的な契約条件が明記されていた[9]。それは後述するレイの契約条件と殆ど同様の内容で、一八九八年の時点で教員招聘契約の原型が出来上がっていることが確認できる。福沢とエリオットとの話し合いにより、リスカムの後任者としてペリー（Thomas Sergeant Perry）が文学科に赴任することになる。福沢は同年六月九日に、ペリーの斡旋を感謝する書

簡をエリオットに送っている。[10]

一八九八年五月には、ドロッパースが帰国の意志を示す。当時の慶應義塾長鎌田栄吉は、エリオットに書簡を送り、ドロッパースの後任者の招聘を依頼した。その際の契約条件も、一八九八年のものと殆ど同様である。[11] これにより、ドロッパースの後任としてヴィッカース（Enoch Howard Vickers）が赴任する。ヴィッカースは一八九九年から一九一〇年まで理財科と政治科に勤め、経済学原理、近世経済史、経済学史、財政学、経済史、商業政策、社会問題、労働問題等の科目を担当した。[12] そして一九一〇年、ヴィッカースの任期満了につき、慶應は再びハーバードにヴィッカースの後任者招聘を依頼する。それにより、ヴィッカースの後任として、レイが一九一一年から慶應に赴任する。

以上の背景を踏まえた上で、以下では「ローウェル・慶應関係文書」に記されている、レイの受け入れ過程について眺めたい。

三、「ローウェル・慶應関係文書：一九〇九―一九〇四」

・一九一〇．八．二七　鎌田→ローウェル[13]

鎌田は当時のハーバード大学総長ローウェル宛に、エリオット元総長とやってきたのと同様に、教員の招聘を依頼する。鎌田が記した契約条件及び待遇は以下の通りである。

ハーバード出身であること
担当科目：経済学史・経済学理論

担当時間：週一五時間上限
契約期間：三年、双方の同意下で更新可能
報酬：一年目三六〇〇円、二年目三九〇〇円、三年目四二〇〇円
旅費：片道六〇〇円、往復分を支給

今回の招聘はヴィッカースの後任人選で、彼が一二月に帰国するため、次の春学期まで間に合うように紹介ができれば嬉しいが、「早く」の紹介よりは「良い」人を紹介してくれることが重要であるため、一～二学期ほど空席のままで待つ意向もあると、鎌田は記している。

また、鎌田は既に、周りからの推薦を受けて特定の「良い」教員を念頭に置いていて、受け入れを希望する後任者候補二人の名前を明記している。ホルコム（Arthur Norman Holcombe）[14]とヒュース（Charles Phillips Huse）である。

ヒュースはハーバードで文学士（A.B., 1904）、文学修士（A.M., 1905）、博士（Ph.D., 1907）学位を取得した人物である。専攻は経済学、中でも公共財政で、博士論文のタイトルは「ボストンの財政史―一八二二～一八五九年」である[15]。これは一九一六年に単行本として出版されており、一九一六年の時点でヒュースはボストン大学の助教授に勤めていた[16]。書簡の時期である一九一〇年にヒュースは、経済学科の講師（Instructor）としてハーバードに在職しており[17]、大学公開講座行政委員会（The Administrative Board for University Extension）にも所属されていた[18]。同年度の講義に関しては、「貨幣」、「自治体財政」科目を担当しており[19]、当時経済学科長（Chairman）であったタウシグ（Frank William Taussig）教授の「経済学原理」授業のアシスタントでもあった[20]。また、一九〇五年には「Henry Lee Fellowship」に選ばれていた[21]。

ホルコムは、ハーバードで文学士（一九〇六）と博士学位（一九〇九）を取得した。専攻は経済学、中でも公共サービス産業で、博士論文のタイトルは「ヨーロッパ大陸における電話共有権」である。[22] 彼はとても優秀だったようで、「全ての科目における優秀」と「専門分野における最高優秀」両方の理由から最高優秀文学士（A.B. summa cum laude）を取得しており、[23] さらに政治学で「最高優等生（Highest Honors）」、行政学と経済学で「選外優秀（Honorable Mention）」に選ばれた。[24] 一九〇七年と一九〇八年には「Rogers Fellowship」を受けてドイツとフランスに一年ずつ留学し、一九〇八年には「英国の電話産業」という論文で「The Bowdoin Prize」を受賞し、二〇〇ドルの賞金が授与された。[25] 一九一〇年にはハーバード行政学科の講師として在籍しており、博士論文で「The David A. Wells Price」を受賞し五〇〇ドルの賞金が授与された。[26] 講義に関しては、「政党の歴史と組織」や「ヨーロッパとオーストラリアにおける自治体のオーナシップと調整」科目を担当した。[27] ホルコムは一九一〇年から一九五五年までハーバードに在職しながら、同大学における行政学科カリキュラムの基礎を作り、一九五四年にはコロンビア大学から名誉文学博士が授与された。弟子の中にはキシンジャー元国務長官やロッジ元国連大使がいて、またケネディ元大統領はしょっちゅう彼にアドバイスを求めたという。[28]

一九〇六年と一九〇九年、ホルコムとヒュースは共に「経済学原理」授業のアシスタントを担当していた。[29] 両者が知り合いであることが推測できる。鎌田は書簡で「周りの推薦からあがった二人の候補者」としか記していないため、二人を知った具体的な経緯は定かではない。後述するが、当時慶應の理財科教師として在籍していたハーバード出身のマクラレン（Walter Wallace Mclaren）がハーバード大学経済学科とも交流を続けていたため、そこからの繋がりではないかと、現時点では推測するのみである。マクラレンは一九〇五年に、ヒュースと一緒に「Henry Lee Fellowship」に選ばれていた。

・一九一〇．一〇．三一　タウシグ→ローウェル[30]

当時ハーバードの大学経済学科長タウシグが、ローウェル宛に招聘の件について書簡を送る。文頭でタウシグは「私は招聘の件（Japan Professorship）を忘れていない」と書いている。総長であるローウェルが担当学科に招聘の件を伝え、適任者人選作業を任せる流れと考えられる。また日付から考えて鎌田の八月の書簡以来、二か月間進展がなかったことも伺える。実際、鎌田は前述の八月二七日付書簡が届いていなかったのではないかと心配し、九月二一日に八月二七日付書簡のコピーを同封してもう一度ローウェルに書簡を送っている。

続けてタウシグは、適任者を探すことが大変であると述べながら、相応しいと思う人物一人に意向を聞いているところであると記している。またローウェルに、現在適任者を調べていて、日本にいる同僚ともその件に関して連絡を取り合っている最中であると慶應に公式的に伝えてほしいと、記している。「日本にいる同僚」は、マクラレンと考えられる。

・一九一〇．一一．三〇　タウシグ→ローウェル[31]

タウシグはローウェルに繰り返し、鎌田の要請に相応しい人物を探す作業が難航であると述べながら、経済学科の提案に従い、当時慶應に勤めていたマクラレン教授にアドバイスを求めていると記している。また、マクラレンに現時点で見つけた一人の人物を紹介し、意見を伺っていると、ローウェルに伝えている。その人物の名前は書簡には記載されていないが、元ハーバードの経済学科学生で講師の経験があり、その後はノースウェスタン大学に勤めている人物であると、タウシグは紹介している。マクラレンもこの人物を知っているため、この人物に公式的な提案をする前にマクラレンの意見を聞いた方が良いと、タウシグは述べている。そして再び、学期中には適任者を探すことが大変であると述べながら、もしマクラレンが上述の人物を相応しいと思わない場合、他

の人が探せるかがとても懐疑的であると記している。

マクラレンは、一九〇八年から一九一四年まで慶應義塾大学の理財科と政治科に勤めていた。彼は一八九九年と一九〇二年にカナダのクイーンズ大学から文学士（A.M）と神学士（S.T.B）を取得し、一九〇八年には「カナダの関税史」という論文でハーバードから博士を取得した。[32] 慶應では「経済史」、「経済学史」、「近世経済史」を教えた。[33] タウシグが提案している人物が誰かについては、定かではない。

・一九一〇．一二．一　ローウェル→鎌田[34]

ローウェルは右のタウシグ書簡を同封しながら鎌田に、人選作業が順調ではないと現在の状況を伝えている。また、鎌田が希望していたホルコムやヒュースの招聘は、「恐れ入るが完全に論外（I fear, wholly out of question）」で、無理であると伝えている。「ローウェル・慶應関係文書、一九〇九―一九一四」に、ローウェルとホルコムやヒュースとのやりとりはない。書簡以外の方法で交渉を試みたがうまくいかなかったか、あるいはローウェルの自己判断で論外であると思ったのか、定かではない。

・一九一〇．一二．九　タウシグ→ローウェル[35]

タウシグはローウェルに、マクラレンの意見を伝える。マクラレンは、タウシグが提案する人物が疑いの余地なく満足できる人物であるかについて疑問を持っていると、否定的な見解を示した。さらにマクラレンはタウシグに、学期中に候補者を無理に探すより、学期が終わるまで待った方が良いという意見をも伝えている。こうしたマクラレンの意見に基づいて、タウシグは、他の人物を探すつもりではあるが、現時点で候補者はいないと、ローウェルに述べている。

・一九一〇．一二．一〇　ローウェル→鎌田[36]

ローウェルは一二月一日付タウシグの書簡を同封し、鎌田に現在の状況を伝えている。また、良い人材は大体一年単位で契約が結ばれているため、学期中に相応しい人物を探すことはとても大変で、今年度の学期末まで候補者推薦を待っていただけるかと、鎌田に意向を伺っている。これに対して、鎌田は一九一一年一月二〇日付書簡で、努力に感謝し九月まで待つ意向があると返信した。

・一九一〇．一二．一二　ローウェル→タウシグ[37]

ローウェルはタウシグに、「Robert Hale」は当分の間その提案を受け入れないであろう、なぜなら彼は現在自分にピッタリの仕事（He has got exactly what suite him）に就いているし、ここを離れて海外に行くことを望まない、という内容の書簡を送った。文脈から考えて、タウシグが事前に「Robert Hale」という人物を候補者に挙げてローウェルに意見を聞いていたことが伺える。

ここでローウェルが言っている人物はヘイル（Robert Lee Hale）と考えられる。ヘイルは一九〇二年にハーバードカレッジに入学し、成績優秀者（cum laude）として一九〇六年に卒業した。彼の元々の関心事は法律であったが、在学中に経済学にも興味を持ち、タウシグのアシスタントとして引き続き大学院で修学することを決めた。彼は一九〇六年ハーバードロースクールに進学し、一九〇七年に文学士、一九〇九年には法学学士（LL.B.）を取得、翌年にはイリノイ州の弁護士資格を取得した。一九一〇年にヘイルはハーバードに在籍しておらず、ニューヨークの通信会社（AT＆T）で勤務していた。大学院在籍中にヘイルは、経済学科のアシスタントとしても勤めながら、「初級経済学」授業を担当した。また一九〇八年前後の時期にはローウェルのアシスタントとしても働き、彼の著作刊行作業を補助した[38]。タウシグとローウェルの間でヘイルの名前が挙がったのは、こうし

た背景からであると考えられる。

・一九一一．二．二五 タウシグ→ローウェル[39]

タウシグはローウェルに、「ピッタリな人物（an excellent fit）」を見つけて、本人が承諾するか様子見中であると、短いメモを送っている。

・一九一一．三．八 タウシグ→ローウェル[40]

タウシグはローウェルに、候補者本人の意志確認が終わり、正式な推薦者としてレイ（Robert Jackson Ray）を紹介する。

まずタウシグはレイの略歴を紹介する。彼はカンザス大学を卒業し、在学中一年間は学生と講師を兼任した。文学士を取得した彼がハーバードの大学院に入ったのは一九〇九年で、大学院での業績が認められ、「Henry Lee Fellowship」に選ばれた。性格の面においても、レイは慶應が求めている特別なニーズ（the special needs）に合うような性格の持ち主で、慎重で思慮深い喋り方をし、素晴らしい存在感と講義力を持っていると、タウシグは記している。

また、今回の推薦にあたっては、当時ハーバード経済学科所属で東京帝国大学に勤めた経験のある、また、レイをよく知っていて、日本での教職業務は彼に合うはずであろうというスプレイグ（Oliver Mitchell Wentworth Sprague）教授のアドバイスがあったと、タウシグは記している。さらに、アメリカにいるマクラレンの友達とも相談をし、彼らは、マクラレンが言っていた慶應のニーズから考えて、レイは慶應に相応しい人物であることに同意したと、タウシグは記した。

レイは、春学期までは準備が間に合わない上に個人的な仕事も残っているので、秋からの赴任を希望しており、契約条件に関しては、住居の問題が書かれてなかったので、給与が所得税の賦課対象である分、住宅補助を求めていると、タウシグは伝えている。

・一九一一．三．九　ローウェル→鎌田[41]

ローウェルは鎌田に右のタウシグ書簡を同封し、レイを正式に推薦する書簡を送った。

・一九一一．四．一八　鎌田→ローウェル[42]

鎌田はローウェル宛に「Ray come Kamada」と電報を打った。急ぎで承知と同意の意を伝えたい旨であると考えられる。

・一九一一．四．一九　レイ→ローウェル[43]

レイがローウェルに、契約条件に問題等がなければ、特に向こうから電報を打つ必要はなく、喜んで慶應義塾大学の提案を引き受けると記している。ローウェルが鎌田の電報の事をレイに伝えていて、それに対するレイの返信であると考えられる。

・一九一一．四．二五　慶應義塾評議員会

四月二五日午後四時半に交詢社で開かれた慶應義塾評議員会において、議案第四十四号として「大学部理財科担任教師レー氏招聘ノ件」が取り上げられる。その説明が以下のように記されている。

ヴィカース氏後任トシテ米国ハアヴァード大学総長ローウエル氏推薦ニ係ル同大学出身マスター、ヲブ、アーツ、レー氏ヲ左記条件ニ依リ傭聘セントス

一　担任学科　経済学原理及ヒ経済学史
一　授業時間　一周十五時間以内
一　俸給額　初年年俸三千六百円　二年目年俸三千九百円　三年目年俸四千二百円
一　旅費　来朝ノ際六百円ヲ給シ満期帰国際六百円を給ス
一　契約期間　三ヶ年
一　住宅料　月七十円
満期後双方ノ合意ニ依り本契約ヲ継続スルコトヲ得
右可決[44]

レイが要求していた住宅支援が、契約に含まれていることが確認できる。

・一九一一．九．一六　鎌田→ローウェル[45]

レイが無事に仕事に着手したことを伝え、推薦のお礼を述べている。

四、慶應・ハーバード関係を巡る幾つかの示唆点

以上、「ローウェル・慶應関係文書」を通して、一九一一年に慶應義塾大学に赴任したレイの招聘過程につい

て眺めた。関連するいくつかの示唆点について触れてみたい。

（一）給与

まず金額的な側面を検討すると、レイの給与が極めて良い条件であったことが確認である。

当時慶應義塾の給与明細を見ると、レイには一九一一年九月から一九一四年八月まで、毎月給与三〇〇～三五〇円（契約条件に従って毎年昇給）と宅料七〇円が支給されており、また一九一四年一月から七月の間には詳細が定かでない毎月一一五円（一〇〇円＋一五円）の金額が追加で支給されている。さらに、備考欄には、契約条件の一つである「旅費金六百円」以外に、「手当金貳百五拾円」が支給されている。[46] 当時の銀行員初任給が月四〇円、公務員初任給が月五五円、巡査初任給が月一五円、小学校教員初任給が月一二～二〇円であることを考えると、[47] レイの給与がどれだけ高額であったかが推測できる。給与以外の「福利厚生」の面でも、レイが受領した住宅支援金七〇円は、当時東京の平均家賃が五二〇銭であったことを考えると非常に高い金額で、[48] また、一九一九年の時点で横浜―シアトル間の旅客船の平均運賃が約一四〇円だったことを考えると、[49] 旅費として支給された六〇〇円も相当な金額にあたる。

当時の慶應義塾大学部教員の給与状況から比較しても、レイの雇用条件は格別なものと言える。戸村理は『戦前期早稲田・慶應の経営』において一九一二年における大学部教員の処遇と負担についてまとめており、それによると、慶應教員の年間給与中央値は八四〇円で、レイより高い給与を受領している人はマクラレンしかいない。[50] 日本人教員で最も給与の高かった法律科の神戸寅次郎の月給が一五五円で、理財科でいうと堀江帰一や気賀勘重の月給が一四五円だったのである。[51] 専任教員であった彼らの給与は時給で換算すると約三円で、[52] 当時時間制教師であった福田徳三や美濃部達吉の給与がそれより高い「一時間金四円ノ割リ」であることが確認できるが、[53] レイ

の給与を時給で換算すると、五・四一円にあたる。

戸村は、当時慶應では外国人教員を厚遇する形で教育課程を運営していたとまとめており、[54] 確かにレイを含めて、当時二〇〇円以上の月給を受領する上位五人は全て西洋人であった。一方で、慶應義塾の「外国人教職員情報」[55] によると、一八九九～一九一四年の間に赴任した外国人教員四一名の中、月給三〇〇円以上を受領した人はヴィッカース、マクラレン、レイ、ブカナン（Daniel Houston Buchanan）、ホイットナック（Ralph Cahoon Whitnack）の五人のみで、これらの人物は全てハーバード出身である。外国人教員の中でも、レイを含むハーバード絡みの人物に対する処遇は、別格なものであったことが確認できる。

（二）「絆」の構想

こうした背景を踏まえた上でもう一つ注目したい点は、慶應がハーバード出身の招聘教員に対して、金銭以上の「絆」を示唆するような待遇をしていることである。それは、前述した福沢の「分校」構想の名残、あるいは延長線である可能性をも示唆する。

改めて慶應・ハーバード間の教員招聘の流れをまとめてみると、福沢とエリオットの話し合いを通して、三名のハーバード出身者が初代大学部教員として赴任した。そのうち経済学科（理財科）に赴任したドロッパースの後任として、鎌田とエリオットの話し合いを経てヴィッカースが赴任する。ヴィッカースの後任としては、レイが赴任した。本稿では割愛しているが、以後、レイの後任としてホイットナックが赴任し、ホイットナックの後任としてブカナンが赴任している。彼らは皆、レイと同様の選任過程を経て慶應に赴任したハーバード出身の教員である。ドロッパース→ヴィッカース→レイ→ホイットナック→ブカナンという招聘教員の系譜が出来上がっているのである。

「ローウェル・慶應関係文書」には本稿で取り上げた一九〇九～一九一四年間の資料以外にも、「一九一四―一九一七」、「一九一七―一九一九」、「一九一九―一九二二」、「一九二八―一九三〇」の資料も収められており、[56]そこにはホイットナックやブカナンの選任過程が表れている。彼らは皆書類上の正式な「後任者」として赴任しており、福沢が一八九八年最初に定めた契約条件を、ほぼそのまま継承している。すなわち、慶應・ハーバード間の教員招聘は、総長同士といったトップレベルから行われた人事であり、かつ決まった形式をとっている、公式的なプログラムに近い形であったと考えられる。

慶應義塾の評議員会議事録を見ると、これらの教員に対する特別扱いが確認できる。例えばヴィッカースの退任時に評議員会では、「本年限解約、金千円贈与　大学部教師　イ、エッチ、ヴィカース」と報告が挙がり、「右ヴィカース教授贈与金ヲ弐千円ニ増加修正シ其他原按ノ通可決ス、尚左ノ二項ヲ決議セリ」としている。「左ノ二項」とは、「義塾ニ於テヴィカース教授及同夫人ノ為メニ送別会ヲ開キ福沢社頭ヲ座長トシ評議員及夫人出席スルコト」「ヴィカース教授ニ其功労を表彰スル謝状ヲ贈ルコト但此謝状ヲ作ルコトハ理事者ニ委任スルコト」[57]である。二〇〇〇円に増額した贈与金と感謝状、送別会を賜っていることが確認できる。レイの退任の際にも、評議会では「大学部教授レー氏贈金ノ件」が議論され、二五〇円の贈金が贈呈されている。[58]ホイットナックの退任の際にも贈与金二五〇円が、ブカナンの退任の際には慰労金三〇〇〇円が贈与された。[59]

五、おわりに

本稿では、「ローウェル・慶應関係文書一九一九―一九一四」資料を中心に、一九一一年慶應に赴任したレイの具体的な選任過程について眺めた。その上で、大学部設立当初から続いた教員招聘を巡る慶應・ハーバード関

係についても考察した。

資料分析を通して、レイの選任が容易な作業ではなかったこと、様々な候補者が議論されたこと、選任にあたっては日本を経験したことのあるアメリカ人のネットワークが働き、経験者のアドバイスを重視していたことが確認できた。また、総長同士の話し合いを通じて、慶應は恒例のように、決まった形でハーバードから教員を招聘していて、それは極めて良い契約条件のものであったことも確認できる。

福沢が慶應義塾をハーバードの「分校」にしたいと述べるほど、慶應がハーバードとの交流を重視していたことは、慶應側の資料から確認できた。それに対して、ハーバードがどのように対応し、どういった考えを持っていたかを究明することが、慶應・ハーバード関係における今後の課題であると考えられる。実際、前述した福沢の「分校」構想に対してエリオットは、「受験生は郵便事情のため結果を知るまでに最低六週間もかかるということ」が「たった一つ不便」であるとし、「将来における慶應義塾とハーバード大学の関係については、貴方がすでに実行または提案している方法を進めていけば長く待たずとも自然に発展すると私は確信している」[60]と返信しているが、具体的な対応は確認できず、福沢の構想が実現することはなかった。また教員の招聘以外にも、福沢は慶應義塾とハーバード大学の間で留学のための特別な協定を結ぶことを模索し、それをきっかけに大学部第一期生の池田成彬（のち、日銀総裁）もハーバードに入学することになるが、この協定も実現しなかった[61]。本稿ではその試みの一環としてハーバード側の資料を一部紹介しているが、ハーバード大学アーカイブスには「ローウェル・慶應関係文書」以外にも「エリオット関係文書」や、レイの招聘作業を実質的に担当した「タウシグ関係文書」、鎌田が候補者として望んでいた「ホルコム関係文書」等も収められている。これらの資料を検討することで、明治・大正期における慶應・ハーバード関係の全体像、さらには私立大学における外国人教員招聘過程の様相を詳しく掴むことが期待できる。

今後の課題として最後にもう一つを加えると、一連のレイ招聘過程で大きな役割を担当した慶應所属のマクラレンについても、さらなる研究が必要であると考えられる。マクラレンは、ドロッパース→ヴィッカース→レイ→ホイットナック→ブカナンにつながるルートを経ていないが、彼らと同様の契約条件で慶應に赴任したハーバード出身者である。彼は福沢や鎌田、エリオットの書簡に登場することはなく、赴任の経緯もほとんど知られていない。レイの事例からみて、彼が仲介役として慶應とハーバードの間に立っていたことは明らかであるため、マクラレンの赴任経緯へのさらなる研究は、慶應・ハーバード関係のさらなる詳細を究明できる糸口の一つになり得ると考えられる。

（1）　本稿は、福沢諭吉記念慶應義塾学事振興基金による研究成果である。

（2）　東京大学編『学問のアルケオロジー』（『東京大学コレクション五、学問の過去・現在・未来、第一部』、東京大学出版会、一九九七年）、四一七頁。

（3）　明治初期における政府雇用の外国人の数に関する研究については中村赳「御雇外国人の研究—とくに数の考察」（『法政史学』第一六号、一九六四年）を、中期以降の外国人教師雇用に関する研究については大野延胤「明治後半期における外国教師」（『学習院女子短期大学紀要』第二〇号、一九八二年）等を参照。

（4）　三好信浩『日本教育の開国—外国教師と近代日本』（福村出版、一九八六年）、四七頁。

（5）　Universities and Colleges - Keiogijuku (Japan). Records of the President of Harvard University, Abbott Lawrence Lowell. UAI 5.160.x, UAI 5.160, [Series 1909-1914] UAI 5.160, Box 49, Folder number 1453. Harvard University Archives.（以下、「Lowell-Keio 1909-1914, Box 49, Folder 1453」）

（6）　慶應義塾の大学部設置を巡っては、「大学部はアメリカのユニテリアンの助けがなければ、誕生しなかったかもしれない」（清岡暎一編『慶應義塾大学部の誕生—ハーバード大学よりの新資料』（慶應義塾、一九八三年）、vii頁）

と評されるほど、ナップを含むユニテリアン教会関係者たちも重要な役割を果しているが、本稿では割愛する。福沢とユニテリアン教会と大学部設置との関係に関しては、白井堯子『福沢諭吉と宣教師たち―知られざる明治期の日英関係』（未來社、一九九九年）を参照。

（7）小川原正道『慶應義塾の近代アメリカ留学生―文明の「知」を求めた明治の冒険』（慶應義塾大学出版会、二〇二三年）、一三五頁。

（8）一八八九年四月日未詳エリオット宛福沢諭吉書簡（慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第六巻、岩波書店、二〇〇二年、一三三―一三六頁）。日本語訳は前掲『慶應義塾大学部の誕生』、三五頁。

（9）一八九八年一月二六日付エリオット宛福沢諭吉書簡（慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第九巻、岩波書店、二〇〇三年、一二―一五頁）。日本語訳は前掲『慶應義塾大学部の誕生』、一〇一―一〇二頁。

（10）一八九八年六月九日付エリオット宛福沢諭吉書簡（前掲『福沢諭吉書簡集』第九巻、三二―三三頁）。日本語訳は前掲『慶應義塾大学部の誕生』、一〇四―一〇五頁。

（11）一八九八年八月五日付エリオット宛鎌田栄吉書簡（前掲『慶應義塾大学部の誕生』、一〇五―一〇六頁）。

（12）池田幸弘・小室正紀編『近代日本と経済学―慶應義塾の経済学者たち』（慶應義塾大学出版会、二〇一五年）、一四頁。

（13）Lowell-Keio 1909–1914, Box 49, Folder 1453.

（14）鎌田は書簡で「Holcomb」と記しているが、当時のハーバード大学名簿等から見て「Holcombe」と考えられる。

（15）*The Harvard University Catalogue. 1907–1908*, Cambridge: Published by the University, 1908, p. 295

（16）Charles Phillips Huse, *The financial history of Boston from May 1, 1822, to January 31, 1909*, Cambridge: Harvard University Press, 1916, pp. ix, 395)

（17）*The Harvard University Catalogue. 1910–1911*, Cambridge: Published by the University, 1911, p. 28

（18）Ibid., p. 284

（19）Ibid., p. 345

（20）Ibid., p. 343

(21) *Harvard University. Reports of the President and the Treasurer of Harvard College 1905–1906*, Published by the University, 1907, p. 152
(22) *The Harvard University Catalogue. 1909–1910*, Cambridge: Published by the University, 1910, p. 296
(23) *The Harvard University Catalogue. 1906–1907*, Cambridge: Published by the University, 1907, p. 272
(24) Ibid., p. 263
(25) *The Harvard University Catalogue. 1907–1908*, p. 122, 263. *The Harvard University Catalogue. 1908–1909*, Cambridge: Published by the University, 1909, p. 122, 264, 271.
(26) *The Harvard University Catalogue. 1910–1911*, p. 29, 236.
(27) Ibid., p. 340
(28) "Arthur H. Holcombe, Harvard Leader, Dies", New York Times, 1977. 12. 14, p. 51. 記事には「H」と表記されているが、略歴からみて明らかに「N」の間違いである。
(29) *The Harvard University Catalogue. 1906–1907*, p. 471, *The Harvard University Catalogue. 1909–1910*, p. 377
(30) Lowell-Keio 1909–1914, Box 49, Folder 1453.
(31) Lowell-Keio 1909–1914, Box 49, Folder 1453.
(32) *The Harvard University Catalogue. 1908–1909*, p. 295
(33) 前掲『近代日本と経済学』、一五頁。
(34) Lowell-Keio 1909–1914, Box 49, Folder 1453.
(35) Ibid.
(36) Ibid.
(37) Ibid.
(38) 以上のくイルの略歴については、Neil Duxbury, *Robert Hale and the Economy of Legal Force*, The Modern Law Review Vol. 53, No. 4 (Jul. 1990), p. 422 を参照。
(39) Lowell-Keio 1909–1914, Box 49, Folder 1453.

（40） Ibid.
（41） Ibid.
（42） Ibid.
（43） Ibid.
（44） 一九一一年四月二五日付「第八期第十九回慶應義塾評議員会議事録」（「明治・大正期慶應義塾評議員会議事録」、慶應義塾福沢研究センター所蔵）。
（45） Lowell-Keio 1909–1914, Box 49, Folder 1453.
（46） 「給料カード」「本塾教師　Robert Jackson Ray」（慶應義塾福沢研究センター所蔵）。
（47） それぞれ、週刊朝日編『値段史年表：明治・大正・昭和』（朝日新聞社、一九八八年）、五一頁、六七頁、九一頁、九二頁。
（48） 前掲『値段史年表』、一九八頁。
（49） 日本経営史研究所編『日本郵船百年史資料／日本経営史研究所編』（日本郵船、一九八八年）、七七〇頁。
（50） 戸村理『戦前期早稲田・慶應の経営―近代日本私立高等教育機関における教育と財務の相克』（ミネルヴァ書房、二〇一七）、一三八頁、一四一頁。
（51） 前掲『戦前期早稲田・慶應の経営』、一四一頁。
（52） 前掲『戦前期早稲田・慶應の経営』、一四一頁。
（53） 「給料カード」「福田徳三」「美濃部達吉」（慶應義塾福沢研究センター所蔵）。
（54） 前掲『戦前期早稲田・慶應の経営』、一四三～一四四頁。
（55） 慶應義塾一五〇年史資料集編集委員会編『教職員・教育体制資料集成』（『慶應義塾一五〇年史資料集』二　基礎資料編、慶應義塾、二〇一六年）、一二六六～一二七三頁。
（56） ただ、「一九一四―一九一七」の資料に関しては、ハーバード大学アーカイブスのデータベース上では存在しているが、実際に現地で閲覧申請をしたところ「見つからなかった」とのことで閲覧ができなかった（閲覧申請日：二〇二二年八月二三日）。

(57) 一九一〇年一一月一五日付「第八期第十四回慶應義塾評議員会議事録」(「明治・大正期慶應義塾評議員会議事録」、慶應義塾福沢研究センター所蔵)。
(58) 一九一四年六月一六日付「第九期第九回慶應義塾評議員会議事録」(「明治・大正期慶應義塾評議員会議事録」、慶應義塾福沢研究センター所蔵)。
(59) 前掲『教職員・教育体制資料集成』、一二七二頁。
(60) 前掲『慶應義塾大学部の誕生』、四三頁。
(61) 前掲『慶應義塾の近代アメリカ留学生』、一三六頁。また、池田成彬のアメリカ留学を巡る詳しい研究については、小川原正道「池田成彬とアメリカ—ハーバード大学留学期を中心に—」(『法学研究』第九六巻第九号、二〇二三年)を参照。